

## 教育における実践の智の提唱 Propose “the wisdom of practice in education”

多田 孝志  
(Takashi TADA)

### Abstract :

When we face up to the social situation which is unpredictable and changing dynamically, we cannot consider the direction of the education to bring up a leader of the future society if we persist only "in a frame of the education".

By breaking out of our shell, we can enhance the power to create the future. It is indispensable for us to defeat a fixed idea, think open-mindedly and flexibly, and have an attitude of learning from the wisdom of the human or the terrestrial life form which we've continued researching until now.

In this paper, I propose “the wisdom of practice in education”, which ties the wisdom of various fields and the educational practice together as the practical philosophy on which we should put the keynote of the education in a new era.

キーワード：新たな時代 叡智の融合 教育における実践の智

Keywords : New era The integration of wisdom The wisdom of practice in education

### はじめに

研究には2つの方向がある。一つは、研究がすでに学会の承認を得て、その上に、学問を広げ進めていく方向である。二つ目は、その研究が、いまだ学会の承認を得ていないで、その研究にいろいろな角度から、さまざまな批判が加えられ、あるいは、その研究をめぐる、別の分野からの知見がよせられる場合である<sup>1)</sup>。また、教育には現状維持型の教育と革新型的の教育があり、社会の変革期には時代の変化に対応した革新型的の教育を探究する必要がある。

本稿は、上述した考えを端緒としている。変化する時代の教育に必須なのは、その教育の内容・方法の基盤となる理念ではなからうか。本稿では、その理念を構築するための有用な手掛

かりとして、「教育における実践の智」を提唱する。

教育実践研究を専門とする筆者にとって、目白大学はまさに、研究と修養の場であった。学生たちとの交流の日々の中で、また多くの敬愛する先達や朋との協同研究や対話によって理論・実践上の知見を啓発されてきた。自己の教育実践研究の集大成としての「教育における実践の智」の提唱は、本学の紀要に掲載したいと願った。

まず、「教育における実践の智が」必要な時代的背景の考察からはじめることとする。

### 1 新たな時代の到来

いま、人々はこれまで当然とってきた社会

のあり方がかわり、何かが終わろうとしていることに漠たる不安感を抱きつつある。倫理観や価値観の変革さえ見通せる、先行き不透明な社会の到来を感じながら、その何かの正体は明らかにされていない。はっきりしているのは、私たちの世界が地殻変動にも似た大転換期を迎えていることだ。

新型コロナウイルスの世界的流行は、その対応をめぐり、今後の世界が途絶に向かうのか、共創・共生に向かうのか、その岐路にあることを示しているように思えてならない。日本の災害地での相互扶助の活動、ニューヨークに広がる貧困層の救済を目的としたコミュニティ冷蔵庫運動や世界の免疫・ワクチン研究者たちの共同研究の動き等には社会の連帯の動向を見出せる。

他方、ソーシャル・ディスタンスの流行となり、人間相互の隔離は、地域・近隣の親和関係づくりの機会を消失させ、学校生活においても、教師たちの必死の努力にもかかわらず仲間とのface to faceの関わり、他者との五感を通しての温もりのある交流の機会が激減しようとしている。いま急速に進行しているオンライン化は、新たな知的世界の広がりへの期待をもたらす。しかし、その利便性のみにとどまり、活用の意義を深察しなければ、やがて人間にとって知性の貧困、人間関係の希薄をもたらすにちがいない。

新たな時代とは、不透明性 (Opacity)、相互依存性 (Interdependency)、変動性 (Volatility)、不確実性 (Uncertainty)、複雑性 (Complexity)、多様性 (Diversity)、未来志向性 (Future-oriented) に、その特色あると考える<sup>2)</sup>

こうした社会の複雑性・多様性・不確実性などをむしろ活用して、自己や他者、多様な生命体、事象とのかかわりを重視し、対話し、熟考し、人間が本来持っている叡智を生起させ、新たな共生・共創型の未来社会を創造する人間の育成が求められている。「教育における実践の智」の提唱は、新たな共生・共創型の未来社会を創造する人間の育成のための教育の基本理念を構築する手立てとして構想した。

## 2 異質との共生社会の人間形成

新たな時代に望まれる共生・共創型の未来社会とは「異質との共生社会」と考える。では、「共生」とは、どのような概念として捉えればよいのだろうか、「共生」とは、文字通り多様な他者や人間 (自己・他者) や社会、さらには自然と共に生きるということである。その「共生」には同質の文化や価値観をもつ人々が共同体を営む「予定調和的な共生」と文化や価値観・行動様式・思惟方式等の異なる人々・生命体が集う「異質との共生」がある。共生・共創型の社会における「共生」とは「異質との共生」なのである<sup>3)</sup>。

異質な文化や価値観を持つ人々との共生においては、心の襞まで理解し合う、また、双方が完全に納得できる合意や一致はできない。しかし、本質的に分かり合えない部分があっても、「共にある」ことはできる。共に希望ある未来の構築に向けて協同することもできる。異質・多様性のよさを認識すると、分かり合えない部分があるからこそ、互いに惹かれあい、共にあろうとする意識も起きてくるのである。

異質との共生とは多様な他者・生命体が共に時空を共有することである。健全な社会には多様な個の存在が不可欠である。その他者同士は、自立はしつつも、緩やかに相互浸透し相互変容していく。それはアメンバーがふれ合い、互いに浸透していく状態に似ている。互いの個性を尊重しつつ、相互に影響し合い、相互浸透 (inter-penetration) し、相互変容していく、さらには出会う前には予想もしなかった世界を共創していく。共生とは、こうした動的な状態なのである。

本稿では、「異質との共生」とは、多様な他者と共に、対話や共同作業を通して、対立や異見をむしろ活用し、混沌・混乱を創発の母胎と位置付け、希望ある未来社会の実現に向けて、共通の課題を解決していくこと、また、新たな文化の創造に参加していこうとする動的状態として捉えることとする。

こうした共創・共生型社会に生きる人間が具備すべき資質・能力・技能はなにであろうか。本著においては以下を重要と位置付ける。

・多様な人々と異見や対立を乗り越え、課題に

- 立ち向かい、新たな解や智を共創できるための基本的技能としての共創型対話力の習得
- ・地球社会の一員としての当事者意識・多文化共生のマインドをもち、いまある現実の課題の解決のみでなく、未来をみすえる（バックキャスト）思想の涵養
- ・想定外、理解できない状況におかれたとき、柔軟な発想で、対立や不条理と向き合い乗り越えられる臨機応変の対応力の育成
- ・自他の精神的自由を大切にし、自己変革・自己成長への勇気をもつ人間の育成
- ・多様な知識・能力・理解・技能・経験などを統合・総合し、新たな解や知恵を生起させる共創力の育成

### 3 新たな時代における人間形成を希求する教育実践の理念

新たな時代の知の体系は様々な知がフュージョンされたものであり、複雑・多様で変動する混とんとしたものといえる。こうした時代の人間形成を希求する教育実践の基底におくべき理念とその要件を検討する<sup>4)</sup>。

#### (1) 外部からの視点を意図的に取り入れる脱システムの思想をもつ

日本の教育、ことに初等・中等教育は世界でも高い水準にある。しかし、その学習は標識が明確に示され、整備された舗装道路を一齐に走らせるごとき傾向があったのではなからうか。グローバルな社会では、相互理解の不可能性、利害の対立など厳しい現実と直面する。泥沼を踏破し、峻厳な山脈を超えるように、勇気や胆力と逞しさを発揮し、挫折や失敗をおそれず、ときには発想を転換しつつ、与えられた条件の中で最良を選択できる知恵や行動力が必要となってくる。ダイナミックに変化する社会に対応できるための知恵や行動力を育むためには、「脱システムの思想」による、外部からの視点を取り入れた学習を体験することが効果的である。

人間は、自己の所属する集団の行動様式、思维方式、倫理観などの制約を受け、システムの中で生きている。しかし、システムの内側にのみ留まっていたら、世界の多様性は実感できな

い。世界の現実には自分の属する集団での常識や価値観では理解できない、通用しない多様性に満ちている。また、世界は予測不能な変化を続けている。

こうした状況に対応できる人間形成を意図する学習では、思い切って、システムの外に飛び出し、多様な立場からの視点を獲得すること、学びの空間を、過去・現在・未来に広げ、さらに教室にとどまらず世界と関連させた立体的な視野をもつこと、あるいは、意図的に自明とされる自己の常識や価値観を外からの視点から見直す姿勢をもつこと、人間中心の思想に固執せず、多様な生物とのつながりの視点をもつことなど、脱システムの思想をもつことが必須といえる。

#### (2) 間主体性と感性的アプローチ

共生社会の担い手としての人間の全人的発達を希求するためには、人間の持つ根源的な感性を鋭敏かつ豊かにする教育が重要である。

地球社会・生命共同体は、さまざまな生命や事象のつながりによって成り立っている。間主体性すなわち、自己を維持しつつ多様との相互補助的なかかわりをもつことが共生社会に必須の要件である。そのかかわり（絆）自体を強固にするのは、互いの間における、相互浸透、相互響感、相互理解の促進であろう。

楽しい、嬉しい、辛い、厳しい、寂しいなどの相手の思いや心情を感じ取れる心、響き合う心情、わかり合おうとする姿勢（感性的アプローチ）が希望ある未来社会の担い手としての人間の精神の高みを形成し、さまざまな生命や事象とのつながりをも確かなものにしていくのではなからうか。

冷厳な現実の渦巻く国際的な関わりにおける、他者の立場や本音の把握も、推察・イメージ力、洞察力などは、鋭敏な感性によってこそなされる。

厳しい立場の人々・多様な生命体への「悲しみの共有」、「負の国際化へのまなざし」<sup>5)</sup>、生起する地球的課題への当事者意識・関心なくして地球生命系の維持・発展は望めない。

自己・他者、人間以外の生物、様々な事象との「間」を意味あるものにする学びこそ大切で

あり、感性的アプローチはそのための基本的姿勢である。

### (3) 異との出あい・ズレ、対立の活用

異質との共生社会における人間形成を希求する学習とは、新たな解や叡智の創造への共創意識を共有し、異見や対立の尊重と活用による多様な価値をぶつけ合う学習（ズレを生かした学習）である。

文化的背景や価値観、行動様式や思惟方式が異なる人々が共生する社会では、相互理解の難しさ、居心地の悪さが生起する。そうした社会で多様な他者と共存・共生するたための資質・能力、技能を高めるためには、学校教育において、他者・さまざまな生命・事象、多様な文化・価値観・体験・生き方と出あわせ、異見やズレなどのぶつかりあい、対立を活用する学習を意図的に行う必要がある。

多様なもののぶつかり合い、ズレや対立の活用はときには混乱・混沌をもたらす。しかし、その混乱・混沌を経ることにより、新たな知恵や解決が共創され、深い思考力を育み、共創的な人間関係を形成していく契機となる。

### (4) 深い思考を生起させる統合・総合・共創力の育成

20世紀は細分化の時代と見ることができる。知識を細切れにし、生活を細分化し、学問を専門化してきた。例えば、学問領域の細分化は、部分的、断片的な専門分野のスペシャリストを育成し、科学や経済を発展させてきた。しかし、細分化した知見では、様々な要因が複雑に絡み合い、ダイナミックに変化する地球的課題を解決できず、思惟方式や生活様式の異なる人々と共生することは難しい。新たな時代の教育においては、総合的に物事を捉え、多様なものを統合・総合し、新たな知見を共創するための資質・能力、技能こそ、必要となっている。

総合・統合・共創は、「深い思考」による「探究」によってもたらされる。論理的な見方・考え方だけでなく、多様な体験や感じたこと、心に響いたことなどを、整理・分類し、考察し、統合・総合するために深く思考することが新たな知的世界を共創させる。付言すれば、共感力、

直感力、類推力などを重視することは、総合・統合を促し、発想の転換や視野の拡大をもたらすし、共創にむかわせる有用な手立てといえる。

### (5) グローバル対話力の育成と活用

国際理解教育を専門とする筆者は、中近東、中南米、北米に合計6年間にわたり滞在し、現地の人々と交流してきた。またユネスコの国際会議・海外教育視察団、海外の学会との学術交流などに参加し、さらに、心の赴くままに世界の44カ国を旅し、多様な文化的背景をもつ人々と語り合ってきた。

この体験から、さまざまな人々と関わっていくことが求められる時代・社会に生きていく子どもたちには、異見を受け入れ生かす、対立に直面したとき、それを乗り越える、他者と協力して何かを創り出す対話力を育ませたいとも考えている。また、言語表現とともに身体的接触、身体表現、また他者との間合い（時間的・空間的）を測る力など多様な非言語による対話力を培わせる必要があることを実感している。こうしたグローバル時代・多文化共生社会に不可欠な対話力を「グローバル対話」と名付けることとした<sup>6)</sup>。

「グローバル時代の対話」とは文字通り、参加者が協力して、利害の対立の現実や相互理解の難しさを認識しつつ、意見・感覚・体験などを出し合い、新たな価値や解決策を生み出すことにその特質がある。

## 4 教育における実践の智の必要性の背景

本稿では、新たな時代の教育を推進するために「教育における実践の智」の必要を提唱している、その背景について考察しておく。

教育は未来を拓く創造的な営みである。先行き、不透明で、価値観や生き方が変化していきだろう社会の到来を背景に教育には新たな時代・社会に対応した人間の育成が期待されているのである。

それは、地球環境の破壊、難民・紛争の発生、貧富の格差の拡大、絶滅危惧種の急増などの地球的課題が顕在化し、分断・隔離の兆しがみえる世界の冷厳な現実への対応ができ、文化や価値観の相違や利害の対立などのアポリア（哲学

的難題)へ挑戦し、生命の危機をもたらす新型コロナウイルスに打ち克ち、人工知能 (artificial intelligence: AI) への優位性を発揮できる知性と行動力をもった人間の育成ではなかろうか。このために、従前型の体系化された知の伝達というパラダイムでは対応できず、新たなパラダイムの創造が求められる。

筆者は、新たな時代の人間形成を希求する教育実践の5要件を前述した。それらは長年の教育の理論・実践研究の成果の集約であった。しかし、この要件を教育実践と結びつけるためには、何かが足りない。それぞれの要件の根拠となる理念がまだまだしっかりしていないとの思いが払拭できなかった。

新たな時代の人間形成を推進する教育の基調に置くべき実践哲学ともいうべき理念を明確にしていくためには、従前の教育の理論・実践の枠を超え、人類の英知・現代文明の先端的知見、多様な学際的分野から提示される未来の教育への提言に手がかりをもとめる必要があると考えるに至った。

教育における実践の智の構想は、異分野融合の重要性を基本においている。自然科学系だけでなく、哲学・政治・経済・文化・医療、外交など様々な分野から、専門領域の枠を超えた、異分野融合が、広義な教養を育み、新たな叡智を創出することは、国文学研究と極地研究、生物学と工学などの癒合により証明されている。人類の英知・現代文明の先端的知見、多様な学際的分野の考察から抽出される見解と教育実践が結びつくことにより、新たな時代の教育の方向についての理論的根拠が明確になり、さらに、新たな叡智が生起されるにちがいない

学びという臨床的実践的な世界を対象にししながら、教育学の境界を超え、自由に発想し、理系、文系の枠を越えた様々な領域の知、深遠な内容を包含する知の世界から、新たな時代の教育の方向への根拠を求めていくことは、冒険であり、批判、反発、疑問をよぶことも覚悟しなければならない。

しかし、人類史を辿るとき、人々は勇気と冒険心、創造力と対話により、新たな世界を切り拓いてきた。人類史上の大変革の教育の方向もまた、大胆かつ先駆的試みによってこそ、明ら

かにされていくのではなかろうか。

## 5 教育における実践の智の提唱

本論では、新たな時代の人間形成を推進する教育の基調の置くべき実践哲学を模索する手立てとしての「教育における実践の智」を提唱する。

先行き不透明で、ダイナミックに変化していく社会の状況を直視するとき、未来社会の担い手を育成する教育の方向は、「教育の枠」のみに固執しては検討できない。殻を破ることが未来を創る力を高めるのであり、固定観念を打破し、広い視野や柔軟な思考で、現代までに探究され続けてきた人類・地球生命体の叡智に学ぶ姿勢が不可欠である。

先達の探究してきた教育理論を参考にしつつ、さらに広く、人類・多様な生命体の叡智を加味する、その総体を「教育における実践の智」と名付けることとした。

「教育における実践の智」は、基本的に二つの要素により構成されている。ひとつは、教育学の枠を超え、哲学・文学・美術や科学・生物学・人類学など諸学の研究成果、さらに多様な生命の織りなす営みに生起する意義ある行為の教育への援用である。他のひとつは、教師たちの実践から生起する事柄である。学習環境への配慮、学習材開発・分析、補助資料の工夫、学習者を勇気づける精神面の支援、一定の結論にとどめず、さらなる思考を深めていくための「ゆさぶり」等の教師スキル・経験値・実践知ともいうべき事項である。このふたつの要素が融合された総体を「教育における実践の智」と名付けることとした。

これまで筆者が考察してきた範囲で、教育における実践の智の具体化を考察していく。

### (1) 先端的知見、多様な学際的分野の考察から抽出される研究成果と教育実践との融合

実践の智のイメージを明確にするため、先端的知見、多様な学際的分野の研究成果を教育実践との融合について考察する。

#### ○ 人類学の視点

人類学の研究成果から、人間の特質を導き出

し、育むべき人間力について明らかにし、教育実践への援用について考察する。

最近の人類学の研究は、ホモサピエンスとネアンデルタール人との違いを明らかにしている。ネアンデルタール人の脳は、ホモサピエンスのものより1割も大きく、その腕力は2倍もあったという。しかし、4万年前、ネアンデルタール人は絶滅し、ホモサピエンスは生き残り繁栄した。それは、ネアンデルタールが、石器にみられるように数万年にわたり、昔ながらのやりかたを継続していたのに対し、ホモサピエンスは、さまざまな石器を工夫したように創造的に生活を改善していたことによるという。また、偶然のDNAの組み換えにより、言葉を高度に発達させることができ、言語の獲得が伝達による広範囲での狩りを可能にさせ、さらには、生きるための知識を引き継ぐことができるようになった。

やがてホモ・サピエンスは、酷寒のシベリアでの残留、新大陸アメリカへの到達、広大な海を越えての南太平洋への進出等、世界各地に拡散していった。その壮大な旅の途上で、困難・障害に直面したとき、それを乗り越える知恵を生み出し、冒険心や勇気により新たな世界に歩み出していったのである。

『ザ・ピエンス全史』の著者、ユヴェル・ノア・ハラリは、「ホモ・サピエンスが世界を征服できなのは、何よりも比類なき言語のお蔭ではなからうか」と記している<sup>7)</sup>。

こうしたホモ・サピエンスの歩みをみると、人間の特質とは、「創造力、勇気と冒険心さらには言語の習得と活用」にあると受け止めることができるようだ。

このことは、学びにおいて、創造力、勇気と冒険心を喚起させ、対話力を向上させる取り組みは、人間の本来的特質を伸長させる営みにつながると考えられるのではなからうか。

霊長類、とくにゴリラの研究者として知られる山際寿一は、次のように語っている。

- ・人間がゴリラやチンパンジーの生息地を離れて新たな土地に旅立とうとしたのは、ゴリラやチンパンジーが持ち得ない、好奇心が芽生えたことによる、
- ・弱い動物としての人間の進化の歴史は、類人

猿にはない結束力を育んできたように弱みを強みに変えることにある。

- ・人間の持っている大きな力が想像力
- ・常識を破るところに人間の面白さがある。
- ・人間の赤ちゃんは、周囲の世界をまず、触覚で捉える。次は何でも口に入れる、味覚、そして嗅覚、だんだんと、自分の身体と離れたモノを理解の対象としていく。その過程を十分に行わないと総合的な判断を身体ができなくなる。聴覚がきて、最後に視覚がくる。
- ・人間の身体の信頼性というのは、触覚、味覚、嗅覚、聴覚、視覚の順で薄れていく。子ども時代にそういうものをつくりあげていく時代、その感覚を、発揮させないでいると、その子どもは、自分の中できちんと納得しながら、世界を理解していくことができなくなる。
- ・ゴリラの集団は、いつも身体のどこかで「接触」している。この身体でつながっていると感覚が人間の生活でもとても重要
- ・人間には、脳でなく、身体でつながるということが、もともと根源的に刻み込まれていた<sup>8)</sup>。

山際の見解からもまた、人間の特質としての「好奇心、想像力、冒険心」の指摘、さらに、身体感覚を練磨する大切さを示唆される。

最近の人類学の研究手法は、学びの方向に示唆を与えている。「ヒトとは何か」を問う学問である人類学には、社会・文化的側面から探求する「文化人類学」と、生物としての人間の特徴を明らかにしていく「自然人類学」があり、長らく、おもに化石証拠に頼って進められてきた。しかし、20世紀後半、DNA（デオキシリボ核酸）の解析などを利用した生化学的な研究が登場し、現代では化石と並ぶ人類史研究の軸となったという。

人類史の研究者篠田謙一は、「DNA解析が科学研究や石器をもとにした研究より特別に優れているわけではない」とし、「一つの問題を複数の視点から見ること、新たな知見や発見がもたらされる」と記しているが、学びにおける、多様な視点からの探究の意義にも通底すると共感した<sup>9)</sup>。

## ○ 哲学に学ぶ

壮大な哲学の叡智の世界をすべて探究するこ

とはできない。新たな時代の教育の方向の探究には哲学を学ぶことが重要ととらえる筆者は、主として二人の哲学者から実践研究への啓発を受けた。一人は、17世紀オランダの哲学者ベネディクトゥス・デ・スピノザ（Benedictus de Spinoza）である。

スピノザは、「人間存在とは、喜び、悲しみ、欲望によって変状（刺激を受けて変化する）することにある。同じ、刺激を与えても個々によって、変状は異なる」と述べている。さらに、「自由」や「意志」の本来の意味を探究し、完全な自由な意志はありえないと指摘し、「自由な意思によるとされる行動も、その背景には、周囲の状況等、外部の要因が決定に影響を与え、行為をする」と記し、また「受動による、さまざまな心的厳しさは、それを理解・分析することにより、完全には、払しょくはできないが、軽くすることができる」とも述べている。<sup>10)</sup>

彼の思想を十全に理解することは難しいが、教育実践の視点からスピノザの言説を考察すると、学習者の個々に応じた学びの必要、環境設定の大切さを示唆された。また、自己肯定感がもてず、内向き志向になりがちな青少年に、自己内対話により、自己の状況を客観的に見とる姿勢を修得させることが自己復元（レジリエンス）につながることに気づかされた。

西洋哲学が、全体と個人を区別し、ときには外の世界と自分とを対立させ、さらに個人と個人、自分と自分の精神まで区別視する傾向があるのに対し、すべてのものは差別なく平等と考え、「万物我と一体」の東洋的思想から哲学を探究したのが『善の研究』で知られる西田幾太郎であった。

石川県河北市の丘陵地の一角に『善の研究』で知られる西田幾多郎記念哲学館がある。夏の一日、この記念館を訪ね、西田幾多郎の思想にふれ、響感し、啓発された。西田は、難解な哲学用語ばかりでなく、親しみやすく、わかりやすい西田幾多郎の言葉を残している。とくに心に残った言葉を記す。

- ・我々の最も平凡な日常の生活が何であるかを、最も深く掴むことによって、最も深い哲学がうまれるのである。
- ・ごまかしてはいけぬ。棄ててはいけぬ。

そこを突破することによって、意外な思想の飛躍を遂げることができるのだから。

- ・哲学の動機は「驚き」ではなくして、深い人生の悲哀でなければならない。

西田哲学の深遠な内容を理解することはできそうもないが、厳しい現実世界の生活の中で思索を深めた西田の言葉に教育実践者のひとりとして何度も深く頷いた。学びの場における、日常のささいな行為変化に大きな意味を見いだす実践研究を推進することへの励ましを受けた。

## ○ 複雑系の科学

スチュアート カウフマンや米沢富美子等の複雑系の科学による自己再組織化についての理論研究の成果から、学びにおける多様性の活用や次々と深い思考を生起させるための自己再組織力の重要性についての示唆を受けた。このことが、教育実践における沈黙・混沌、省察など、「ときの活用」は、深い学びを希求する学習の有用な方途となることに確信をもつ理論的根拠となった。

21世紀の科学を拓くとして注目されている「自己組織化理論」の旗手S. カフマンの言説は、学びにおける混沌や混乱を通して新たな叡智が再組織化されてくることへの理論的根拠を与えてくれる。

カフマンは「われわれは、さまざまな要素が驚くほどに複雑に絡み合った生物学的複雑系の世界に生きている。あらゆる種類の分子が集まって物質代謝というダンスを踊り、細胞を作っている。その細胞は他の細胞とたがいに作用し合い、多様な組織を形成する。そして組織はいろいろな組織と相互作用し、生態系、経済、社会などを形作っている」<sup>11)</sup>と記している。

複雑系の科学の研究の進展により、注目されるのはカオス理論である。近現代の学びは、論理性や効率と集中を重視し、ひたすら無駄をなくす方向で展開する傾向にあった。しかし、先行き不透明でダイナミックに変化する時代の人間形成は、正解を効率よく求め、スタート時にゴールを定め、順序よく迫っていく学習だけでは希求できない。カオスとは、一般的にはさまざまなものが入り混じる混沌とした状態を示すが、単なる混沌とは異なり、やがて、ある秩序

を生起させる。注目されるのは、カオスを研究する複雑系の科学は、例外や無駄、役に立たないようにみえることがらの中に、システム全体に大きな影響を与える可能性があることを示唆していることだ。

カオス理論の実践化と関連する思考法に「デザイン思考」がある。学際的ですからすべてを包含しつつ、そこから新たな発想をもたらす思考法で、大まかな方向を定め、着想・発案・実現の行程を経て、細かいところは試行錯誤を繰り返して、決めていく考え方である<sup>12)</sup>。

スケールフリーネットワークの発見を含む複雑系の科学の進展により、カオスには「自己再組織化」という秩序があることが明らかにされたことだ。都甲潔・江崎秀・林健司は、科学研究の立場から「自己組織化とは何か」について「自己組織化とはランダム＝でたらめから、秩序＝整然とした状態へと自分で組み上がっていく現象である。このように自分で作り上がってしまう現象が自己組織化である。自分で組織化する（作り上げる）という意味である」<sup>13)</sup>と説明している。

複雑系の科学・自己組織化論は、カオス論が明示するように、多様性が混在する混沌から秩序が生まれ新たな知見が創生し、その繰り返しが次々と更なる知見を生み出していくことを解明した。

教育実践の視点から複雑系の科学の研究を考察すると、次の示唆を受けることができよう。

- ・ダイナミックに展開する学びにおいてはその流れの折々に、「再び」自己の見解・主張等を組織し直すはたらきが必要である。
- ・例外や無駄、役に立たないようにみえることながらも含む多様性の活用が深い思考を促す。
- ・混沌・混乱は創発の母胎であり、その活用こそ、新たな知的世界を展開させる。
- ・無駄、役に立たないようにみえることながらも、視点や発想をかえる契機となる。

複雑系の科学・自己組織化論は、混沌から新たな知見が創生し、その繰り返しが次々と更なる知見を生み出していくことを明示する。このことは、学習において一定の結論にとどまらず、次々と論議の深まりを追求していくことへの、理論的な根拠と受けとめられる。

また、自己再組織化、混沌・混乱の活用のためには、省察・振り返りのための「とき」の担保が必要であり、その具体的方途を模索していくことが教育実践に求められる。

## ○ 脳医学

最近の脳科学の研究で注目されてきたのは、デフォルト・モード・ネットワーク (default mode network) である。何もせず、ぼんやりしている時間にこそ、活動している脳の回路があることが発見されたのである。無為に見える時間に、心の整理ができたり、新たな発想に気づいたり、ストレスを解消したりするというのである<sup>14)</sup>。

教育実践の視点からみると、このことは、学びの過程における漂うように自由に浮遊し思索していくこと（こうした思考の状態を「浮遊型思索の時間」と名付ける）ことの大切さを明らかにしたと受けとめられる。

思索の原点である問いには、「知識・情報を求める問い」と「内省的な問い」があろう。前者により、自分の知識・情報を拡大することができ、自己の知的世界を拡張するという可能性を獲得する。後者により、自己を振り返り、思考を深め、視野を広め、自己変革・成長させていくことができるのである。「知識・情報を求める問い」は、他者への問いとなり、「対話」に導くが、次には「対話」が「問い」を生み出す。問いと対話は循環を継続しつつ、新たな地平を切りひらいていく。一方、「内省的問い」は「孤独と省察」を余儀なくする。自由な思索の時空の中で、自己に問い続け、そのプロセスをへて、本当の自分の思いを明らかにしていく。浮遊型思索とは「内省的問い」ともいえる。

浮遊型思索の時間とは、現象としては、沈黙・瞑想・孤独、場合によっては「書く」時間でもある。その時間帯には葛藤し、悩み、戸惑いが生起し、混沌が支配することもある。やがて、その時点での自分なりの考えや感想がまとまっていく、つまり混沌から創発に至る。こうして漂うように思考・感情が揺れ動き、思索が浮遊する時間を保障することによって、深い考察、多様な視野からの熟慮ができ、「納得できる自分の見解」をまとめることができるのである<sup>15)</sup>。



脳医学研究によるデフォルト・モード・ネットワーク研究の成果は、学びにおける効率性やスピードの強制でなく、ぼんやり、ゆったりする思索の時間の担保の大切さを示している。

脳科学の研究の進展は「脳は、未知のことに出会い、どう対応したら分からない状況のときにこそ、フル稼働する」ことも明らかにしている。

異や未知との出会いについての脳科学の研究成果を授業に援用することにより、協同学習における、意図的に多様な見解・体験をもつ学習者をチームに構成させることや容易には解決できず、多元的な視点からの探究が必須のハードルの高い学習課題の設定が学習効果を高めることへの理論的根拠を得ることができた。

さらに、ズレや異見の活用、推論や類推・直感などに関わる様々な分野の学術研究の成果は、深い学びを生起させる学習方法に示唆を与えている。

## ○ 冒険論

教育実践を推進する立場から、角幡唯介、植村直巳、菊池徹の冒険論を考察する。

冒険の本質について、本格的に探究し、論述しているのは、自身がチベットで人類未踏の峡谷を踏破し、太陽がまったく昇らない冬の北極圏で闇の中を長期にわたって放浪するなど独創的な挑戦を続けてきた冒険家角幡唯介である。

角幡は人類が太古から抱いてきた冒険のイメージを明確にするために、神話における英雄の冒険譚が概ね、召命→助言者の登場→境界を越える→試練→勝利→帰還と展開するという比較神話学者ジョーゼフ・キャンベルの言説を分析して、「境界を超える」ことの重要性を指摘している。境界線を越えると、その外側はシステム内部の常識では予測のつかない混沌や闇に支配された領域に変わり、その領域への旅立ちにこそ、冒険の神髄があるというのである。

角幡の批評性は、現代における冒険の困難さ、脱システムの難しさへも言及する。システムとは「人間の行動を管理し、制御する無形の体系」と捉え、現代社会におけるこのシステムが「いくつもの構成要素が複雑に絡みあい、渾然一体となって構成されている」ため、脱シス

テムを困難にしていると喝破し、さらには脳のシステム化、すなわち「答えが簡単に得られる環境に慣れきってしまったこと」が、脱システムをより困難にしていると指摘する。

角幡は、なぜ冒険論を書き残すかについて、「世間と乖離して自分の倫理を獲得し、独自の言葉の意味を見つけて自立すること」の意義を記し、「システムの外に飛び出して外側からの異なる視点を獲得することで、常識を見直し、自明とされてきた既成概念や価値を見直すきっかけが得られる。それがシステム内部にいたら決して見えてこない社会の矛盾や偽善をあぶり出すことになるかもしれない」と述べている<sup>16)</sup>。

日本を代表する冒険家は植村直巳である。1970年には世界初の五大陸最高峰登頂者になり、世界的に注目された。1978年、犬ぞりですれの単独行で北極点に達した。1984年に世界初のマッキンリー登記単独登頂を果たしたが、2月13日を最後に音信不通となり、消息不明になる。そのため、1984年2月13日が彼の命日とされている。植村の生き方と人柄に惹かれ、筆者はその足跡を旅し、記念館を度々訪れてきた。兵庫県豊岡市の植村直巳冒険館には、彼の言葉が記録された文献がある。下記は植村の言葉である。

- ・探検家になるために必要な資質は、臆病者であることです。
- ・必ず壁はあるんです。それを乗り越えたとき、パッとまた新しい世界がある。だから厳しく自分を鞭打ってやってきたときは、振り返ってみたとき実にさわやかです
- ・人の生きる本当の価値は、お金や肩書きなどではなく、夢を追い求め一瞬一瞬を精一杯生きることにあります
- ・いくら私が冒険が好きだからといっても、経験と技術もなく、また生還の可能性もない冒険に挑むことは、それは冒険でも、勇敢でもないのだ。無謀というべきものなのだ。それがどんなに素晴らしい挑戦であったにしても、生命を犠牲にしては意味がない
- ・あきらめないこと、どんなときでも決してあきらめないこと。

菊池徹は、西堀栄三郎を隊長とする、第一次南極越冬隊員であり、犬ぞり隊を担当してい

た。映画南極物語の高倉健が演じた主人公のモデルである。

大学教員、通産省役人、開発途上国での産業開発助言者等をへて、新たな人生を求めて、カナダに移住した。筆者はカナダ在住時に知遇を得た。菊池は、自身の世界各地で活動してきた体験から教育に探検志向を持ち込む必要を提唱し、その要諦と「自立性」「危険性」「探究性」「貢献性」にあると主張した。また、第一次南極越冬隊の成功は、隊長西堀栄三郎の「異質との協力、すなわち、同じものにならなくてもよいが違ったもの同士が協力し合うこと」にあったと語っていた。

教育実践の推進の立場からは、角幡の提唱する脱システムの思想は、時空を超えた見方・考え方、多様な立場からの視点の必要を示唆される。植村直巳の生き方からは、困難さを超えていく、難しい課題に挑戦する意義と、それを超えるための知識や技能の修得の大切さを示唆される。

菊池の教育に探検的志向を持ち込む主張や、恩師西堀の「異質との協力」の思想は、大胆な勇気と繊細な準備による課題解決力を育む教育の展開への啓示を与えられる。

異質との協力について付記すれば、造形作家岡崎乾二郎の見解も示唆に富む。批判的視点から、近代芸術を展開してきた諸作家の活動を大胆に解析したのが岡崎乾二郎である。その著書『抽象の力』（亜紀元書房 2019）では、膨大な資料を率直かつ大胆に分析し、異質な情報を衝突させ、その衝突点から新たな知の世界を生起させている。岡崎のきわめて刺激的な論の展開から、批判的思考の在り方、脱システムの思想の大切さ、異質の活用の意義を啓発された。岡崎の見解は、冒険論に通底するといえよう。

現代文明の先端的知見、多様な学際的分野の考察から抽出される見解と教育実践とが融合し、「教育における実践の智」となったとき、新たな時代の教育の人間形成に対応した教育の基本理念が形成されていくと考える。

諸学の本質を学び取ることは難しい、しかし、実践研究者が実践展開の手がかりを求めて真摯に取り組むとき、実践現場だけでは得られない新たな視点を獲得する契機となり、さらに

自己の教育実践の方向に確信をもつことにつながる。また、今後は、諸学の研究者たちが、新たな時代の人間形成に関心をもち、専門の立場から教育実践への提言をすることを期待したい。

## (2) 教育における実践の智を共創する教師の志

実践の智を事実としての学習者の成長に結びつける、その要諦は教師の志にある。実践者教師たちが、さまざまな分野の先駆的な研究に関心をもち、文献を読み、自身が心を揺るがす体験をし、多様な人々と真摯な対話をするとき、視野が広まり、思索が深まる。そうした知的冒険心により得た知見を「荒ぶる魂を」を奮い立たせ、自己の教育実践に結びつけたとき、新たな学びの地平が拓かれていく。

全国各地の学校の実践研究に参加してきた。ほとんどの学校では3年から5年間以上にわたり継続して関わってきた。そうした学校の実践研究の基盤は研究授業である。研究授業の企画段階では、同僚教師たちが子供たちの実態を念頭にいれつつ、真摯に、自由闊達に研究授業について語り合い、ねらいを分析し、学習材を選択・吟味し、学習プロセスをさまざまに工夫していた。

注目すべきは、実践の背景となる諸学の研鑽である。対話論のみならず、さらに、動物行動学や芸術論さらに最新の科学論を学び、そこから得た知見を学びに活用しようとしていた。それは創造性に溢れた愉悦の漂う時空であった。

実践された授業の質の高さは無論だが、目を見張るのは先生方の教育実践力の向上である。若い先生がいつのまにか優れた実践者へと成長していった。その実践者としての成長が、研究協議会での活発かつ探究蓄積型の論議を継続し、学校全体の学びを質の高いものにしていった。「事実として子供たちの成長につながる実践」を創造していくこと、それは教師たちが「誇りと自信」を復権していく道でもあることを確信した。

教師たちの新たな教育を創る担者としての志によってこそ、事実として学習者を成長させる「実践の智」が生起され、持続可能で希望ある未来を構築するための新たな学びが共創でき

る。子どもたちに成長を願い、試行錯誤しつつ、高みをめざし、知見を広げ、新たな学びを仲間と共に創り、実践していく、その体験が教師としての自信と誇りが復権させる。

そのためには、教師たちに「心身のゆとり」をもたせることが必須の要件であることを強調しておきたい。

#### まとめにかえて

壮大な人類の叡智の全体を把握することは不可能である。しかし、さまざまな分野の先駆的な研究に関心を持ち、文献を購読し、感性・感受性・靈性を錬磨する多様な体験をなし、多様な人々との真摯な対話を継続していくとき、視野が広まり、思索が深まる。そうした知的冒険心により得た知見を実践研究と結びつけたとき、新たな時代の教育の地平が拓く手がかりを得ることができよう。

「教育における実践の智」の試行・探究・省察は、やがて、学校教育に関わる多様・多彩な叡智を結晶化させる。その整理・分析、系統化・構造化により、事実として学習者を成長させる新たな時代の「教育実践学」が構想できると信じる。

教育の流行を視野に入れつつも、皮相的理論、儀礼的用語にあたふたと惑わされず、どっしりと構え、学校教育の基盤の変革に対応する、地についた実践と理論を融合した研究を進める、その知的共創的な活動を多くの仲間が共に展開することを通して、教師たちに「誇りと自信」を復権させることができよう。

「教育における実践の智」は、押し寄せる改革に振り回されない、専門職としての教師の自立的で手堅い実践の基盤となり、教育実践現場での創意・工夫への努力により、高次元実践を共創させていく源泉になると確信する。「実践の智」を生成するために、教師たちには、知的世界の冒険者・先駆者となることが期待される。

#### 【謝辞】

本論の構想段階の原稿に、田尻信一先生から、的確な批正、助言をいただいた。先生の示唆をなくして本稿を執筆することはできなかったであろう。記して謝意を表したい。

#### 【参考文献】

- ・『学校における国際理解教育』（1997）東洋館出版
- ・『地球時代の教育とは』（2000）岩波書店
- ・『地球時代の言語表現』（2003）東洋館出版
- ・『対話力を育てる』（2006）教育出版
- ・『未来をつくる教育 ESDのすすめ』（2008）日本標準
- ・『共に創る対話力』（2009）教育出版
- ・『授業で育てる対話力』（2011）教育出版
- ・『東日本大震災と学校教育』（2012）かもがわ出版 2
- ・『子どもの対話力』（2012）合同出版
- ・『現代国際理解教育辞典』共編（2013）明石書店
- ・『グローバル時代の学校教育』共編（2013）三恵社
- ・『持続可能性の教育』共著（2015）教育出版
- ・『未来を拓く児童教育—現場性・共生・感性—』共編（2015）三恵社
- ・『教育のこれからを読み解く57の視点』共編（2017）教育出版
- ・『グローバル時代の対話型授業の研究』（2017）東信堂
- ・『対話型授業の理論と実践—深い思考を生起させる12の要件—』（2018）教育出版
- ・『学校3.0×SDGs』共編（2020）キーステージ21
- ・『新時代の教職入門』共編（2020）北國新聞社

#### 【注】

- 1) 大野晋(2007)『考古学・人類学・言語学との対話』岩波書店 p.v
- 2) 多田孝志・米澤利明編(2020)『新時代の教職入門』北國新聞社 p.8
- 3) 同上書 p.27-28
- 4) 多田孝志(2018)『グローバル時代の対話型授業の研究』を参照。
- 5) 「負の国際化」とは、過度の富の追及による経済格差・貧困、政治・文化の衝突により派生した難民問題、人間優位の思想による絶滅危惧種の激増など国際化の負の部分さを。詳細は、金沢院大学教職センター紀要(2019)に詳記。
- 6) 多田孝志前掲書にグローバル対話の概念、育成方法が詳記してある。
- 7) ユヴェル・ノア・ハリリ著 柴田裕之訳(2020)『ザ・ピエンス全史』上 河出書房新社 p.33
- 8) 養老孟司 山極寿一(2020)『虫とゴリラ』毎日新聞出版 参照
- 9) 篠田謙一監修(2015)『ホモ・サピエンスの誕

- 生と拡散!』NHK ブックス
- 10) 国分巧一郎 (2019)『エチカ』NHKテキストに詳記してある。
- 11) ティム・ブラウン、千葉敏生訳 (2019)『デザイン思考が世界を変える』, 早川書房に考え方と具体的方法が詳記してある。
- 12) スチュアート・カフマン、米沢富美子訳 (2000)『自己組織化と進化の論理』, 日本経済新聞社, p.4
- 13) 都甲潔・江崎秀・林健司 (1999)『自己組織化とは何か』, 講談社, p.77
- 14) 茂木健一郎 (2017)『脳を鍛えるデフォルト・モード・ネットワーク』参照。
- 15) 多田孝志 (2011)「共創型対話と浮遊型思索」『目白大学人文学研究』に詳記。
- 16) 角幡唯介 (2018)『新・冒険論』集英社に冒険と探検の相違、脱システム論について詳記。

### 教育における実践の智の提唱

多田 孝志

#### 抄録

先行き不透明で、ダイナミックに変化していく社会の状況を直視するとき、未来社会の担い手を育成する教育の方向は、「教育の枠」のみに固執しては検討できない。

殻を破ることが未来を創る力を高めるのであり、固定観念を打破し、広い視野や柔軟な思考で、現代までに探究され続けてきた人類・地球生命体の叡智に学ぶ姿勢が不可欠である。

本論では、新たな時代の教育の基調の置くべき実践哲学として、多様な分野の叡智と教育実践を結び付ける「教育における実践の智」を提唱する。

キーワード：新たな時代 叡智の融合 教育における実践の智